

鹿を食べる

東京都立国際高等学校 1年 上村 汐来

私は今、朝ごはんを食べようとしている。玄米ご飯になすの味噌汁、昨日の夕飯の鹿肉の炒め物。そんな朝ごはんを前にして課題の作文が頭をよぎる。「私たちと地球の未来」か。私は今からこの朝ごはんを食べる。さあ地球の未来はどうなるだろう。瞬時に無名な七十七億分の一のような存在である私の食事が地球の未来に影響してしまっただろうと心の中で突っ込みが入る。でも寝ぼけた私の頭は風が吹いて桶屋が儲かることがあるのだからと考えを巡らせ始める。

思えば鹿肉を日常的に食べるのは変わっているのかもしれない。なぜうちでは鹿肉が主流なのだろう。母に尋ねる。「ほかの肉を食べるより身体に良いし地球にも優しいからだよ。」と返ってくる。身体にいいのはわかるけど地球に優しいというのがよくわからない。しかし調べてみるとどうもこういうことらしい。

まず大前提として鹿は木の皮を食べる害獣であること。そして皮を食べられた木は枯れてしまうこと。また、現状としてはハンターやオオカミの減少により鹿が近年急増しているということ。それにより被害を被る木も急増していること。結果として森林減少につながり地球温暖化の加速の一因にもなっているということ。「野生だし飼育に必要な水の量も段違いなのよ」と母が口を挟む。

私は少しというかかなり感動してしまった。私が食べるものもほんとに些細であったとしても地球に関係しているんだと。「玄米のご飯を食べるのもしかり。オーガニックのものを買うのもしかり。食べ物に限らず全部国産のものを買うのもしかり。」と母が続ける。昔から役割や物としては同じものなのに母はわざわざ高い方のものばかり買うなと思っていた。けれどその全てに理由があったのだと感嘆したし、母に幼い頃から言われ続けていた「買い物は投資」という言葉を実感できた気がした。

この一連でふと思い出したことがある。私が小学二年生で母に頼まれて買い物に行った時のことだ。何を頼まれていたのか細かくは思い出せないけれど卵を買ったということだけは覚えている。というのも買った卵が母に頼まれたものではなく、怒られた記憶があるからだ。母が普段買う卵は六個入りで二百五十円程する平飼いのもの。でもその時私が買ったものは十個入りで九十八円程度のものだった。当時の私は頼まれたものを買ってこなかったために怒られたのだと思っていた。けれど今ならこれも投資先を間違えたからだとわかる。商品にお金を払うのはその商品の出どころを応援するようなもの。まさに買い物は投資。

でも実際の投資と違うところは年齢関係なく誰でも参加できること。そして投資の見返りの結果がお金では買えないものということ。例えば鹿肉を買えば鹿肉の需要が増えることでハンターが増え鹿が減って枯れる木も少なくなり…結果的に森林が守られる。鹿肉に払うお金で環境を買えているという言い方も出来るかもしれない。平飼いの卵を買えば平飼いをしている農家を応援できるし需要が高まることで平飼いを導入する農家が増えることに繋がったりもする。買うもので社会の考え方も変えてしまえる可能性すらあるのだ。

「私たちと地球の未来」というテーマは最初は壮大すぎだと感じたけれど思っていたより身近、というより本当に目の前のことだった。このことにとっても驚いたし、自分達の行動で未来を変えることも可能だということに希望も抱いた。しかしそれと同時に自分たちの行動で未来を変えてしまえると思うと責任感や恐怖も感じる。無名で七十七億分の一のような存在の私には権力も何も無いけれどそんな私の行動も地球の未来に小さくも影響しているのだ。まるで重大責務でも課されたようにいつの間にかピンとのびている背筋で私は目の前のご飯に手を合わせる。